十文字学園女子大学人間生活学部紀要第3巻　2005年

沖縄県多良間村の子育て環境
― 我が国最高の出生率を有する島の暮らしと文化 ―

The Environment of the Bringing up Children in Tarama Village in Okinawa Prefecture
― the Life and Culture in Tarama Island with the Highest Birthrate in Japan ―

伊藤　わらび
Warabi ITO

1．緒　言

1986年に筆者は、東京都、及び近県に居住する乳幼児を持つ数百名の母親を対象に、育児の実態と母親の育児意識調査を実施した。(注1)　それまでの育児問題は、主に保育所の量的・質的未整備の中で、就労している母親の職業と家庭の両立の困難であった。そのような観点で、調査を実施したところ、孤立化した専業主婦の子育ての問題が、深刻化しつつあることを知った。自由記述欄には、追い詰められた母親の苦しい気持ちが綴られていた。このような、母親の育児の状況を知り、孤立化した母親同士の出会いと、語らいの場を提供するために、我が家を開放して、子ども連れの可能な「子育てを語り考える会」を主宰した。(注2)　1987年のことであり、地域にはまだ育児グループなどが見られない頃であった。間もなく、育児不安や、育児ノイローゼなどが顕在化してきたが、やがて、児童虐待が増加を見せ、大きな社会問題となった。1996年に実施した2回目の調査では、前回の調査項目に加えて、母親の育児の不安感や、児童虐待、自治体の育児支援施策の利用状況や、要望などの項目を追加した。(注3)

一方、「1.57ショック」と呼ばれた1989年の合計特殊出生率は、それ以後も低下し続け、2004年には、1.289と過去最低を記録した。また、生まれた子どもの数は、111万835人と過去最低であった。明治時代以降増加し続けていた日本の人口が、政府の推計より1年早く2005年に人口の自然減が始まった。(注4)「1.57ショック」は、少子化の認識を一般化したといえるが、

十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科
Department of Human Welfare, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：沖縄県多良間村、合計特殊出生率、次世代育成支援対策推進法、宮古地区育児支援ニーズ調査、多良間村次世代育成支援行動計画

政府は少子化問題対策として、1994年のエンゼルプランに始まり、新エンゼルプラン(1999年)、さらに、2003年には、少子化社会対策基本法、次世代育成支援対策推進法、2004年には、子ども・子育て応援プラン等を制定した。2005年10月には、「少子化社会対策推進会議」が設置されるとともに、少子化専任大臣のポストが創設された。(注5)

少子化対策は、国の最重要課題の1つとして取り組まれているが、少子化の歯止めにはなっていない。筆者は、平成17年度の紀要において、全国で最も早い時期から、多様な育児支援施策に取り組んできたにもかかわらず、合計特殊出生率が全国最低にある東京都の育児支援施策の現状と課題について考察を試みた。調査研究から、施策の現状が必ずしも都民の育児支援へのニーズに対応していないことが明らかになった。(注6)

本稿では、全国最高の出生率を有する、沖縄県多良間村の子育て環境と施策について調査研究を行い、出生率の高い理由と背景を考察する。(表1、表2) (注7)

2．研究目的

厚生労働省の調査報告により、1998年～2002年の5年間の合計特殊出生率の全国の市区町村別平均値は、沖縄県多良間村が、3.14で最高であった。多良間村が、出生率が全国最高である理由と背景について、村の子育て環境と、児童福祉施策等の実態などから考察する。また、全国の各自治体に策定が義務付けられた「多良間村次世代育成支援行動計画」について、村民の育児支援ニーズ調査結果をふまえ調査研究を試みる。

3．研究方法

2005年3月22日(火)～26日(土)の5日間沖縄県多良間村に滞在し、村の実態について調査研究をした。多良間村役場を訪問し、村長との面会を始め、民生部、総務部、教育委員会の各担当者より説明を受けた。また、村立保育所、幼稚園、診療所、公民館、図書館、民族学習館等を訪れ見学・説明を受けた。初めの3泊をした民宿丸宮の経営者から、村の実情と将来の展望について話を聞くと共に、村内を案内して頂く。民宿近くに住んでいる老女からも村の歴史と村民の生活について話を聞くことができた。公民館勤務の職員の家族による多良間村の古謡の演奏と舞踊を観賞した。

4．多良間村の概要

(1) 位置と自然

多良間村は、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する周囲約26kmのやや楕円形になった面積約20.05km²の多良間島と、その北方約12kmに位置する周囲約6.5kmの三角形の形をした水納島からなっている。多良間島は、全体的に平坦な地形で、一番高い場所は、島の北側にある32.8mの八重山遠見台である。島の内部は、ほとんどが耕作地として利用されており、島を囲う防潮林や抱護林、数多くの植物群落、フクギ並木が豊かな緑をたたえている。一方鍾乳洞に流れる地下水が人々の生活を支えてきた。島の周囲はサンゴ礁の美しい海に囲まれており、豊かな海の幸を育んでいる。(図1、図2)

〔資　料〕

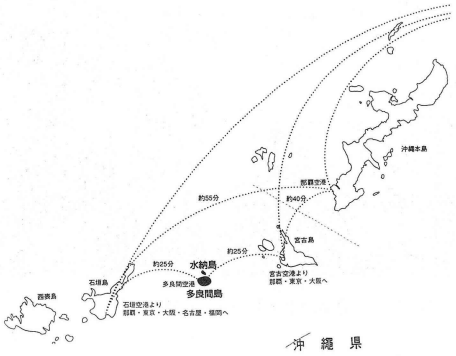


図1

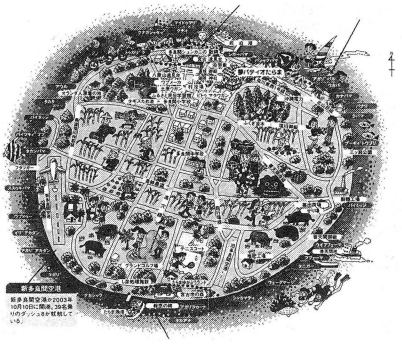


図2　多良間島

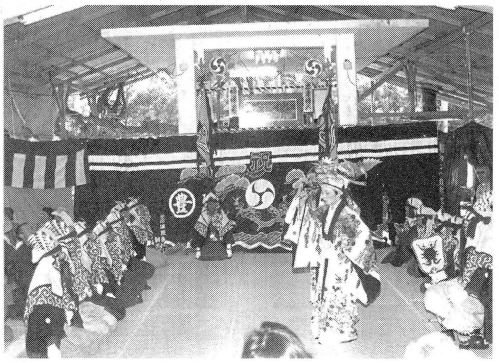


図3　「たらま広報」の表紙を飾っている“八月踊り”の写真

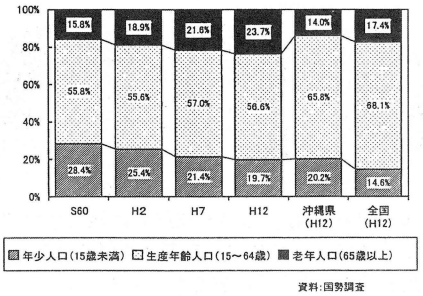


図4　年齢階層別人口の推移

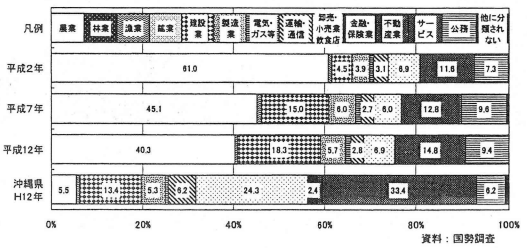


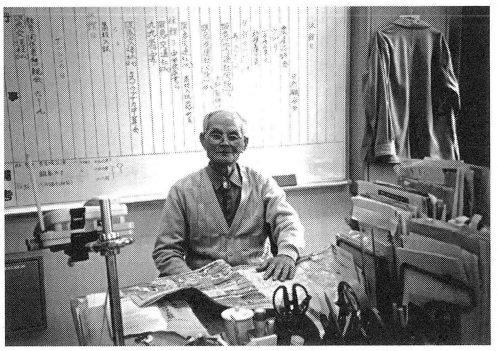
図5　産業構造

多良間村役場
1913年(大正2年)平良村から独立して多良間村として自治施行された。

多良間村長　兼濱朝徳氏

多良間村役場前に建立されている
「多良間村村民憲章」碑(1993年除幕式)
憲章の一つに「としよりやこどもを大事にし、愛情ある村づくりにつとめます」と刻まれている。

村の道路には、「あいさつ」や「生活習慣」「家庭学習」などの呼びかけが、目につく。



「ふるさと民俗学習館」館長、渡久山春好氏。
多良間村制施行70周年記念事業の一環として発行された6巻にわたる「多良間村史」の編集と執筆に尽力された。

多良間村立保育所(0～3歳児)
1979年4月1日開園。2003年12月現在地に改築移転した。道路をへだてて、多良間中学校があり、中学生との交流保育が実施されている。

⑵　多良間村の沿革と歴史

島には、先史時代の貝塚や、中世、近世の十数か所の集落跡や、数多くの遺物が見つかっているところから、かなり古い時代から人が住んでおり、島外との交流が行われていたことが明らかにされている。土原宇曽呂は15世紀末に出現し、人心の教化に努め、宗教政策をとり、島内の諸勢力を統一した。1500年には、八重山の赤峰征討に従軍して、手柄を立て、琉球王府の尚真王から多良間島主に任ぜられ、豊見親の称号を授けられた。称号は1532年に廃止されたことで一代で終止符を打った。

琉球は、1609年薩摩の侵攻を受け、その支配下に置かれた。1637年には、首里王府はその体制維持の一方策として、頭数によって税を賦課する、悪名高い人頭税を課した。それは、農民に重くのしかかり、重税のために困難な生活を強いられることになった。苦難な生活を免れるための神頼みで、1年に10回ほど豊年祈願祭を行った。風干害の繰り返しで飢饉が続いた上に、重税のための生活苦から住民の怒りは王府の収奪体制に対して時折爆発した。また、1771年には大津波に襲われ、多良間島の住民3324名中362名が死亡し、作物もすべて押し流された。村史には、食糧難や、貧苦、病気に苦悩する住民の救済に尽くした多くの人々の名前が記録されている。1879年（明治12年）琉球王朝は崩壊し、沖縄県政が施行されたが、先島への差別は緩まなかった。厳しい人頭税は依然として続き、1893年（明治26年）には、宮古島では人頭税廃止運動が展開された。（注8）

260年余りにわたって住民を苦しめた人頭税は、1903年に撤廃され、地租条例及び、国税徴収法が施行された。1913年（大正2年）2月14日平良村から分村して多良間村となった。1891年（明治24年）には、平良尋常小学校の分校が設立されたが、生活苦に喘ぐ住民は、子弟を通学させることは厳しく、学業奨励のために学務委員が置かれた。

⑶　文化遺産

多良間島主に命ぜられた土原豊見親春源は、御嶽を建て神々をまつった宗教政策をとった。村には、その名残として島の英雄土原豊見親にまつわる史跡や御嶽を始め、名所、旧跡が数多く点在している。また、国指定重要無形民族文化財として、八月踊り（豊年祭）をはじめ　（図3）、県や村指定の有形・無形文化財や、史跡、天然記念物等を数多く有している。（注9）八月踊りとスツウプナカは、村の二大行事で、その時期には、観光客、研究者、マスコミ関係者で村はにぎわう。このような名所・旧跡や伝統芸能は、多良間村の歴史ロマンを彷彿とさせるものから、村の人々の暮らしの中に受け継がれているものまで、村の歴史や暮らしぶりを知る手がかりとなっている。村民たちの誇りであり、現在も人々の生活と心の中に息づいている。

芸能の島と言われるほど、多良間村は唄や踊りが盛んで民謡や民話が数多く伝えられている。古謡には「たらまゆー」や「あんだやーぬ按司」など、120位が伝承されている。また、「多良間の子守歌」や「うじやがうま」などのわらべ唄や、民話が親から子へ、子から孫へと語り継がれている。文字をもたない島社会の人達が、歌で歴史を語り、暮らしを紡ぎ、合唱することで共に生きる共同体の結束を強めてきた。先人達の人生の記録ともいえる古謡は、歴史、伝説、祭事、教訓等を世代を越えて暮らしの中で継承し続けてきており、伝承による優れた文化遺産である。（注10）

5．多良間村の現状と村民の暮らし

(1)　人口、出生率、世帯数

多良間村の人口は、1950年に3800人を有していたが、1980年の国勢調査では1667人となり、30年間で2300人も急減した。平成16年3月末現在の村の人口は1441人である。（表2）　平成12年の国勢調査では、世帯数は522世帯で、「親族世帯」が減少し、「単独世帯」が増加している。人口構成は、近年高齢化が進み、65歳以上人口が平成12年には23.7%を占めている。一方、年少人口の割合は減少傾向にあり、20%を下回っている。生産年齢人口についても、横ばいで推移していることから少子高齢化の進展がみられる。村の出生数は、平成14年は15人で、合計特殊出生率は3.75人である。（表3）村の人口規模が小さいことから、変動がみられ、推移は一定していないが、平成10年以降、3人以上となっている。これは、全国や沖縄県の値を大きく上回っており、特に、1998年～2002年の平均合計特殊出生率は上位全国一位となっている。（表1）

(2)　産業構造、産業、女性の就業率

平成12年の国勢調査結果によると、第一次産業就業者は40.8%、第二次産業24.1%、第3次産業35.1%となっている。産業別にみると、「農業」が40.3%と最も多い。平成2年からの推移をみると、「農業」が減少傾向にあり、「建設業」「サービス業」が増加している。（図5）多良間村の主要作物は、サトウキビ、葉たばこ、とうがん、畜産は、肉用牛の飼養、漁業では、かつお、たい類の漁獲量がが高い。

平成12年の女性の労働力率をみると、30代後半から50代後半にかけてピークを迎える「山型」となっている。全国と沖縄県についてみると、最初のピークは20代となっており、その後、出産や育児期に当る30代前半で減少し、再度30代後半からピークを迎える「M型」となっている。（図6）多良間村では、50代後半から70代にかけて現役で働いている女性の割合が全国や県と比較すると多い。

(3)　多良間村議会、行政と基本構想

村議会は10人の議員で構成され、年4回（3、6、9、12月）の定例会と必要に応じて臨時議会が開かれている。多良間村役場は、村民の快適な暮らしを目指し、さまざまな事業に取り組んでいる。（図7、図8、図9）

「第三次多良間村総合計画」は平成12年度を目標年次とする第二次計画を踏襲し、多良間村が均衡のある発展を成し遂げていくための基本施策を平成13年度を初年度とし、平成22年度を目標年度として作成されている。時代の趨勢といえる人口の島外流出のみられる中で、「将来の多良間村を支える『若い力』をどのような形で育てていくかが、村の懸案課題であり、若年層の定住促進に向けた各種施策の展開が多良間村における最重要課題である」と記されている。また、基本構想の意義と目的を「多良間住民の『幸せ』の実現に寄与するものであると同時に、村を訪れる誰もが島の美しさ、豊かさを享受できるよう実効性に富んだ計画となる」ことが目指されている。（図10）（注11）

表１

自治体別の出生率

【上位10自治体】	出生率	人口
沖縄県多良間村	3.14	1,331
鹿児島県天城町	2.81	7,175
東京都神津島村	2.51	2,143
鹿児島県伊仙町	2.47	7,765
沖縄県下地町	2.45	3,157
鹿児島県和泊町	2.42	7,696
鹿児島県徳之島町	2.41	13,099
長崎県美津島町	2.39	8,399
長崎県上県町	2.39	4,479
長崎県石田町	2.39	4,748
【下位10自治体】		
東京都渋谷区	0.75	190,467
東京都目黒区	0.76	244,794
東京都中野区	0.77	302,658
東京都杉並区	0.77	514,607
京都市東山区	0.79	44,096
東京都世田谷区	0.82	805,031
福岡市中央区	0.82	149,828
東京都新宿区	0.82	270,221
東京都豊島区	0.83	240,329
東京都文京区	0.84	171,799

〔厚生労働省調べ。出生率は98年から02年の平均。人口は、00年の国勢調査の数字〕

表２　人口の推移

各年３月末現在（単位：人、％）

	６年	７年	８年	９年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	H6～15増減率
村計	1,480	1,484	1,472	1,431	1,446	1,440	1,411	1,413	1,435	1,441	-2.6
（増減率）	－	0.3	-0.8	-2.8	1.0	-0.4	-2.0	0.1	1.6	0.4	

資料：住民基本台帳

表３　合計特殊出生率の推移

		平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年
出生数		13	10	17	11	18	18	16	26	15	29
合計特殊出生率	多良間村	1.70	2.85	2.28	2.78	3.03	3.47	3.41	3.09	3.75	
	沖縄県	1.96	1.87	1.86	1.81	1.83	1.79	1.82	1.83	1.76	
	全国	1.50	1.42	1.43	1.39	1.38	1.34	1.36	1.33	1.32	

表４　多良間村の０～５歳児の保育状況

平成16年4月1日現在

	乳幼児数	公立保育所 村立	認可幼稚園 村立	家庭保育等
0歳児	14	1	－	13
	100.0%	7.1%	－	92.9%
1歳児	31	17	－	14
	100.0%	54.8%	－	45.2%
2歳児	14	10	－	4
	100.0%	71.4%	－	28.6%
3歳児	30	24	－	6
	100.0%	80.0%	－	20.0%
4歳児	17	0	17	0
	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%
5歳児	24	0	24	0
	100.0%	0.0%	100.0%	－
0～5歳の合計	130	52	41	37
	100.0%	40.0%	31.5%	28.5%

資料：民生課

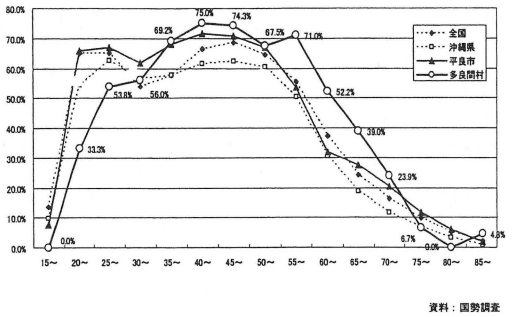


図６　年齢別の女性就業率（平成12年）

多良間村村民憲章

私たち多良間村民は、恵まれた美しい自然と文化遺産の継承につとめ力をあわせて住みよい平和な郷土の発展を願いこの憲章を定めます。

私たち多良間村民は、

一、村の伝統文化を守り、心豊かで和やかな村づくりにつとめます。
一、自然を大切にした活力ある村づくりにつとめます。
一、お互いに助け合いだれにも親切で礼儀正しい村づくりにつとめます。
一、としよりやこどもを大事にし愛情ある村づくりにつとめます。
一、スポーツに親しみ健康で明るい村づくりにつとめます。

図７

（注）
ここでの労働率は国勢調査の労働力人口と15歳以上のデータをもとに算出したものである。

多良間村歌

一、黒潮めぐる　わだつみを
昇る朝日に　照りはえて
ときわのみどり　かがやける
なごみゆたかな　多良間島
平和みなぎる　多良間村
平和みなぎる　多良間村

二、白き真砂に　つつまれて
力あふれる　珊瑚礁
世界の波は　うちよせて
文化花咲く　多良間島
こころみやびな　多良間村
こころみやびな　多良間村

三、古き歴史を　うけつぎて
こぞる村人　はつらつと
興せ鍵音　高らかに
のぞみあふれる　多良間島
いや栄えゆく　多良間村
いや栄えゆく　多良間村

図８

■多良間村教育目標

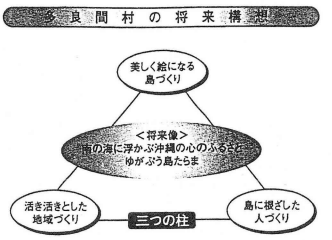
◎自ら学び　心豊かで創造性に富む　人間の育成◎
（個性的で人間性豊かな人）

◎心身ともに健康で　たくましい生命の尊重◎
（スポーツの振興と安全教育の強化）

◎国際性を身につけ　生きがいの追求できる生涯学習社会の実現◎
（生涯学習体系の推進）

◎伝統文化の継承と　新しい文化の創造◎
（郷土の文化を大切にする心を育てる）

図９



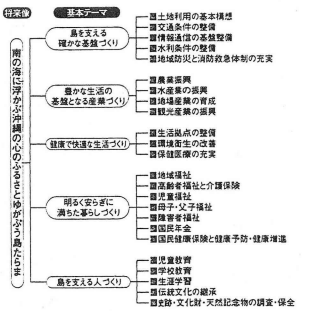


図10　第三次 多良間村総合計画基本構想
（平成13年～平成22年）

(4)　児童福祉

21世紀を担う子ども達が生き生きと健やかに成長するために、施設の整備や良好な環境づくりに努めている。

①　各種手当等

平成13年度の多良間村の母子世帯は10世帯、父子世帯は5世帯である。また、各種手当の受給状況は、「児童手当」1087件、「児童扶養手当」7件、「特別児童扶養手当」3件となっている。

②　多良間村立多良間保育所

多良間村立保育所は、1979年4月1日に開園し、2003年12月、現在の場所（塩川）へ移転した。近代的なデザインの建築で、開放的なオープンスペースと、特に採光に配慮がなされている。（写真6、7、8）　2004年の年齢別在籍数は、0歳2名、1歳9名、2歳24名、3歳12名である。職員は、所長1名、主任1名、保育士7名、調理員2名である。休日は、日曜日、祝祭日、12月28日～1月3日の他、「八月踊り」の3日間となっている。（注12）

保育所長の佐久本千恵子所長は、東京の大学で学び、幼稚園教諭と保育士資格を取得し、都内で保育職に従事した。「第26回　卒園式並びに修了式のしおり」（2005年3月29日）の表紙には、園児たちが掘り起こした大きな大根を手に持った「大根収穫祭」の写真が掲載されている。「平成16年度の保育事業経過報告」を見ると、季節の行事の他に、幼稚園児との交流保育と、次年度から4歳児が通園する村立多良間幼稚園の見学、小学一年生とのふれあい交流会、中学生の見学実習と交流保育、中学校校内駅伝大会応援参加、高齢者生活福祉センター訪問等、地域との交流が保育を通して密になされていることがうかがえる。また、6月28日には「バンザイ　日本一お楽しみ会（出生率日本一）」を始め、「ひまわり畑で遊ぼう」（7月27日）、「凧上げ会」（1月12日）、「大根収穫パーティー」（2月9日）、「お別れ遠足（バスにて多良間一周）」（3月8日）等多良間村の特性を活かしたユニークな保育がみられる。（注13）

(5)　学校教育、社会教育

多良間村には、幼稚園1園（2クラス）、小学校1校（6クラス）、中学校1校（3クラス）が設置されている。学校における生徒数は、昭和22年（1947年）812名をピークに減少の一途をたどり、現在は各学年1クラスの小規模校となっている。小・中学校ではコンピューターを整備し、高度な情報化社会に適応できる児童の育成等、ハード面だけでなく、ソフト面からも人材育成に取り組んでいる。

1993年に文化の拠点として完成した「ふるさと民族学習館」で国の重要無形文化財「八月踊り」をはじめ、村の歴史や文化、民俗芸能の学習がなされている。また、児童の視野を広げるために、姉妹市村との総合交流体験学習や海外へのサマースクール派遣事業の取り組みをはじめ、文化財保護少年団や緑の少年団を結成し、ふるさと多良間を愛し、文化人“たらまっ子”の育成に努めている。生きる力を全身に備え、知育、徳育、体育の調和のとれた人格形成を目指し、学校、家庭、地域が連携し、健全な人材育成を目指している。（注14）

多良間村には高校がないので、多良間中学校を卒業すると、島外の高校へ進学する。15歳で親元を離れることを年頭において、自立した人間を育てるべく、幼少時より家庭教育・躾をしっかり行うことを村民は心がけているという。経済的には決して豊かとはいえない中で、長男以

外は、島外で生きていくことになるため、村民は大変教育熱心であり、大学への進学率も高い。離島であることから、中学校の教員の任期は2年ほどである。

(6) 社会福祉、保健医療

① 社会福祉

生活保護を受給している世帯は10世帯11名であり、476世帯中に占める受給率は2.1%である。平成13年度の一人暮らし老人数は50名、寝たきり老人数は10名である。老人福祉、地域福祉の充実・強化を目的に多良間村社会福祉協議会の高齢者生活福祉センターを拠点に安心して老後が送れる環境づくりが進められている。多良間村社協指定の、居宅介護支援事業所と訪問介護事業所、及び多良間村指定の通所介護支援事業所が社協内に設置されている。一人暮らしの老人や寝たきり老人に対して、家庭奉仕員の派遣やお弁当サービスの実施など、在宅サービスの向上を図る一方、介護保険に対する相談もきめ細かな対応がなされている。身体障害者手帳は87名に交付されている。村では、身体の不自由な人達が安心して日常生活が送れるように、補装具の給付や福祉手当を支給している。また、環境整備にも積極的に取り組むなど、体系的にバリアフリー社会を目指している。(注15)

② 保健医療

病気の予防や早期発見により健康を自ら維持するために、診療所や保健師駐在所（平成17年度は不在）との連携を取りながら、乳幼児検診や、各種予防接種、成人病検診、定期健康診断などきめ細かな事業を実施している。これらの地域医療を円滑に推進するために、医師や看護師の住宅の確保がなされている。

6．出産・育児に関する風俗、習慣

貧しい孤島であった多良間村には、産育から始まり、出産・育児に関して島独特の風俗習慣がみられた。今日では、残っているものも少なくなったようであるが、出産・育児が島ぐるみの重要なものであったことがうかがえる。

(1) 産育

安産祈願をナナツクウガン・ナナツクネガイと称し、妊娠8ヶ月に行った。結婚して、2、3年経って子どもが生まれない場合の作法として、ユタ（巫女）のところへ行って占ってもらった。妊娠7ヶ月から、胎児はもう人間の子どもであるということで、「他人の屋敷の石垣囲いを飛び越えてはいけない」「下水の掃除をしてはいけない」等の妊婦に対する禁忌俗信がある。

(2) 出産

産室は台所または地炉のある部屋に古いムシロを敷き行われた。天井から縄を下して、端を固く結び、産婦の苦しむ時にこれを両手に握らせた。子どもを産むことをファナスといい、出産の夜は、パーウンマ（産婆）や叔母、女友達が寝泊りした。出産のある家を指してシラヤーと称し、この家の軒にススキの三葉ついたものをさした。これは子どもが生まれていることを他人に知らせる示標となり、4日目にとり除いた。パーウンマは多良間には大勢いたが、その大半は神人（神に仕える人）で、生後8日まで赤子と産婦の世話を一切みた。産湯には塩を少

量入れてからパーウンマが赤子の頭の方からゆっくり浴びせた。この赤子を浴せた産湯は、人の通るところや下水などのような不浄な場所には捨ててはいけないとされている。産飯はウブユーといい、晴れの食物として粟で作ったおかゆで、産婦と共に家族、親戚にも振舞った。このウブユーは、お椀から一粒もこぼれないよう注意して子ども達に食べさせた。出産と同時に赤子の額にナベの墨をこすりつけた。これは、将来、この子が成長してから徳が乗り移って裕福に生活できるように占ったものである。焚火は、お産の際に多量出血する産婦がそのまま寝入って昏睡状態に陥るのを防ぐために、産後8日まで地炉でヤラブの木を焚き続けて産婦を温めた。家族や親戚の女性達が昼夜交代で夜通し火を焚き続けて産婦を励まし、元気づけるために行われた。

(3)　育児

乳附親はツーウマンマといい、親戚の中で子どものいる若い母親が選ばれ、産後8日間産婦と同居し、赤子に乳を飲ませた。ツーウマンマと乳児との関係は後々まで自分の子どものように可愛がり、何かにつけてその乳児の面倒をみた。戦後ミルクが手に入るようになってからは、ツーウマンマを頼む風習はなくなった。4日目に命名式を行った。人名には、ワラビナ（童名）と本名とがあり、ワラビナは祖父母の名前を襲用した。ヌンリパズミは、母子共に充分に元気づいた頃の吉日を選び、親戚や、ツーウマンマ、パーウンマの家へご馳走や、酒、金品を携えていった。誕生祝をタンカーヌヨーイといい、3歳の時に盛大に祝う。この日は、パーウンマ、ツーウマンマ、おじ、おば、ムリアニなどごく近親の者が集まって祝宴をあげた。アズキ飯を先に取った時に、その子どもは徳があって将来成功するといって一同手を叩いて喜んだ。このアズキ飯のことをミーチヌツウマイツキと称している。

多良間村に住む大人達は、自分が守姉に子守りをしてもらったこと、また、女性は、少女の頃に守姉をしたことを嬉しそうに語る。この風習は、村の人々が地域の子どもの出生や成長に関心をもち、保育所のない時代の村ぐるみの子育て支援の知恵であったと考えられる。少女たちにとっては、守姉に指名されることは、誇りであり、幼子を世話することに慣れる機会となったといえる。また、親にとっては、娘が他家で食事を振舞われることは、口減らしにもなったであろうし、経済的にも助かったと考えられる。現在は、少女達も放課後忙しくなり守姉も形式的になったということであるが、村では現在も他家の子どもと関わるという風習が残っている。「守姉」について記述された文章を紹介する。

守姉（ムリアニ）

「赤子が一ヶ月ぐらいで丈夫になると親戚や近所のしっかりした少女をムリアニ（守姉）に頼んだ。頼む時は両親が御馳走や酒三合を持っていって、その守姉になる本人や両親に相談する。一般にムリアニになることを喜んで引き受けた。というのはその子供が成長して守姉に反物などを買って与えたり、また婚姻のところで述べたが、守姉はその子供の結婚式の際のユミゾウイの時にマグガマ（裁縫箱）を持つなどや、また自分がしっかりした者であることが認められたからである。守姉は普通小学三年生から中学三年生までの少女がなり学校の授業を終わっ

てから子供の家へ行って子守をした。勿論夕食などはその家で食べさせた。また守姉に対して月々のＰＴＡ会費やその他学用品、運動会や正月、八月踊りなどの祭日には着物、靴、帽子等を買ってやった。守姉は子供が三歳頃になるまで頼むのが普通であったが、前述したように守姉はその子供の家族同様に大変緊密に親しくなっているので、子供が成長してからも暇の折は時々来て、その子供の勉強や、家事等を手伝った。」

平成17年1月29日（土）の多良間小学校と幼稚園の合同学習発表会では、守姉のことを歌っている「多良間の子守歌」を全員で合唱した。(図11)

7．多良間村次世代育成支援対策

(1) 宮古地区の次世代育成支援に関するニーズ調査から－多良間村の特性について

宮古地区（平良市、城辺町、下地町、上野村、伊良部町、多良間村の6自治体）の次世代育成支援に関するニーズ調査は、平成16年3月8日～3月24日にかけて、「未就学児童用」「小学校児童用」「中・高校生用」「20歳代用」の調査票が配布され、回収されている。回答結果によって、他の地域と比較して、多良間村の特性がうかがえる。本稿では、未就学児と、中・高校生対象の調査結果から、多良間村民の育児の実態と意識の一端を把握することを試みる。

① 乳幼児を持つ親の育児の実態と意識

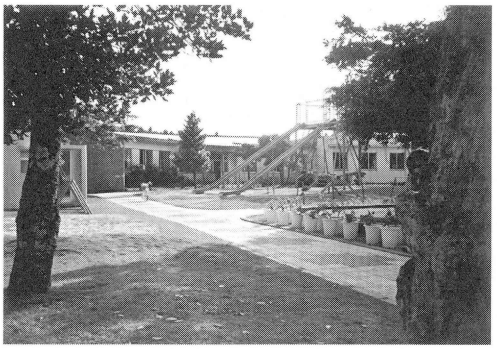
子どもの兄弟数は「3人」が最も多く31.7%である。「宮古郡」の総計では、「2人」が32.0%で最も多く、次いで「1人」が24.9%である。多良間村の未就学児は、兄弟姉妹の数が多いことが分かる。また、世帯の人員は「6人以上」が31.7%と最も多い。「宮古郡」では「4人」が29.3%で最多となっている。

保育サービスについてみると多良間村は「平日の保育サービスの利用希望」が83.3%であり、宮古郡（68.9%）の中で最も多い。保育に対する満足度は「大変満足」と「ほぼ満足」の回答を合計して多いものとして、「衛生対策」88.0%、「施設・環境」84.0%、「食事」84.0%、「安全対策」80.0%等が80%を越えている。一方、「やや不満」と「大変不満」を合計して高いものは、「利用者のネットワーク作り」52.0%、「悩み事への相談対応」36.0%、「保護者の要望等への対応」36.0%等が多い。また、幼稚園（4歳以上）についてみると「大変」と「ほぼ」満足しているものとして、「悩み事への相談対応」88.9%、「日常の保育内容」83.4%、「行事」83.4%、「衛生対策」83.3%が80%を越えている。不満なこと（「やや」と「大変」の合計）は、「安全対策」38.9%、「施設・環境」27.8%、「保護者の要望等への対応」27.8%、「利用者のネットワーク作り」27.8%等が多い。「病気回復期にお子さんを預かるサービスの利用意向」については、多良間村は「利用希望がない」が31.8%と最も多い。宮古群合計では17.8%である。「泊まりがけの用事で子どもを親族・知人に預けた場合の困難度」は、「非常に困難」が12.5%で宮古郡の合計26.1%の半分以下となっている。

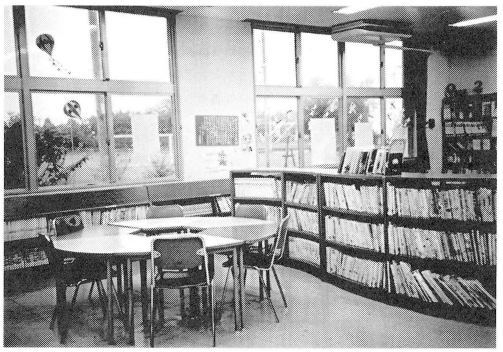
「子育てに関して、不安や負担感等を感じているか」についての質問では、「非常に感じる」と「なんとなく感じる」の合計は28.3%である。(表5)「子育てで悩んでいること」としては、「叱りすぎているような気がする」35.0%、「子どもの教育」25.0%、「病気・発育・発達」20.0%が上位3項目としてあげられている。これらの項目の回答は、宮古郡の総計より多い。

保育所での給食風景。
立っているのが佐久本千恵子所長。

平成17年度保育所入所前の説明会に出席した母親と子どもたち。海外から村に嫁いできた女性の姿も見られる。



多良間村立幼稚園。（左奥の建物）
1980年に小学校の敷地内に建設された。３歳まで保育所で保育を受け、４、５歳児は幼稚園に通園している。



多良間村立図書館内児童図書館。
小学校の放課後ここで過す子どももおり、学童クラブの役割も果している。

沖縄県立宮古病院附属多良間診療所。
妊婦の検診には、二週間に一回、宮古病院から専門医が来島する。急患はヘリコプターで宮古病院へ搬送される。

ウプメーカ

尚真王より1500年に多良間島主に任命され、島の開拓振興につくした土原豊見親の墓。
沖縄県指定史跡。

「多良間村次世代育成支援行動計画」

平成17年3月

7 計画の体系

計画の全体構成は以下の通りとなります。

＜基本理念＞

はばたけ、たらまっこ！南の海に浮かぶ島の恵みをうけて

＜基本的な視点＞

（1）すべての子どもと保護者のしあわせ（やすらぎ）を第一に考える視点

（2）だれもが住み良い地域づくりの視点

（3）地域資源、村外資源の有効活用の視点

多良間村次世代育成計画の施策体系（案）

Ⅰ　健やかに生み育む健康づくり支援の充実
- 1．子どもの成長を支える母性の健康の確保と増進
- 2．子どもの心身の成長を支える健康づくりの充実

Ⅱ　島のみんなが参加する子育て活動の推進
- 1．保育サービスの充実
- 2．幼稚園における支援の推進
- 3．“いっしょに子育て”“いっしょに親育ち”の取り組み充実
- 4．地域の子育てを支えるサポーターの支援充実
- 5．子育てと就労との両立支援

Ⅲ　次代を担う心豊かな人づくりに向けた教育の充実
- 1．子どもの生きる力の育成
- 2．思春期の心と体の健康づくり

Ⅳ　みんながすみよい島づくり
- 1．子どもの安全を守る環境づくり
- 2．島への定住を促進する環境づくり

国の行動計画策定指針

1．地域における子育ての支援

2．母性並びに乳児及び幼児等の健康の確保及び増進

3．子どもの心身の健やかな成長に資する教育環境の整備

4．子育てを支援する生活環境の整備

5．職業生活と家庭生活との両立の推進

6．子ども等の安全の確保

7．要保護児童への対応などきめ細かな取組の推進

図12　多良間の子守歌（ぱがむらぎ）

一、ぱんがむり　うぇーがらしゃばよ　ホイ
　姉がくぎ　ぶどわしゃばよ　ホイヤラ
二、人がたき　なりすてやよ　ホイ
　ゆしゃがたき　なりすてやよ　ホイヤラ
三、すんかきどうず　うまりくよ　ホイ
　筆とりどうず　生りくだよ　ホイヤラ
四、うぶ木だき　生りるよ　ホイ
　高木だき　生りるよ　ホイヤラ
五、うきなまい　いでみくよ　ホイ
　殿地まい　ぬうりみくよ　ホイヤラ
六、沖縄んでず　ときんやよ　ホイ
　とぬつ出でず　ときんにゃよ　ホイヤラ
七、かんびつがいゆ　買いくだよ　ホイ
　かやぎまぐまい　買いくだよ　ホイヤラ
八、かんびつがいぬ　中んなよ　ホイ
　紅型布まい　買いくだよ　ホイヤラ
九、かやぎまぐぬ　中んやよ　ホイ
　ばしゃんがまゆ　買いくだよ　ホイヤラ
十、ばしゃんがまぬ　一つうば　ホイ
　守りたり姉ん　いらばしよ　ホイヤラ
十一、むりたり姉ぬ　いらびぬけうばよ　ホイ
　ぶばまぬけーん　いらばしよ　ホイヤラ
十二、ぶばまぬけーぬ　いらびぬけうばよ　ホイ
　なすたりんまん　ゆずりうきよ　ホイヤラ
十三、ぶだしゃぬやーや　ぼうぐるよ　ホイ
　ぶばまぬやーや　まいぐるよ　ホイヤラ
十四、ぼうぐるだんま　まーだぬぼうぐるよホイ
　まいぐるだんま　まーだぬまいぐるよ　ホイヤラ

「接し方に自信がない」「仕事等が出来ない」「手伝ってくれる人がいない」「心身の疲れ」「サービス利用方法」「経済的負担」等の悩みは、宮古郡の総計に比べて2分の1～3分の1以下と少ない。特に、「経済的負担」の悩みは、宮古群では15.8%であるのに対して、多良間村では3.3%と少ない。一方「パートナーの協力の悩み」については、郡が6.8%であるのに対して、多良間村では15.0%と2倍以上である。(表6)「居住地区は子育てしやすいか」の質問の回答では、「とてもしやすい」35.0%、「どちらかといえばしやすい」58.3%で、「子育てをしやすい環境」と感じている人の割合は93.3%と非常に多いことが分る。宮古郡の中で「とても子育てをしやすい」との回答はトップである。(表7)「子育てをしやすいと思う理由」として、「親が近くにいる」55.4%、「自然環境がよい」46.4%、「知り合いが多い」32.1%、「防犯面で安心」30.4%等の回答が多い。郡の総計と比較すると、多良間村では特に、「防犯面」と「自然環境」が良いと考えられていることが分かる。(表8)

「市町村に対してどのような子育て支援の充実を図って欲しいと期待するか」という質問に対して、「親子で安心して集まれる場」58.3%、「子連れで出かけて楽しめる場所」56.7%が高い割合となっており、次いで、「保育所等の費用負担軽減」36.7%、「ＮＰＯ等による保育サービスの充実」28.3%となっている。(表9)

②　中学生・高校生のアンケート調査結果

「きょうだい」の数は、「3人以上」が87.5%で、宮古郡の中でも最も多い。

「家で決まった手伝いをするか」との質問では、女子は30～40%が「している」のに対して男子は、10～30%に止まっている。家庭内において、男子と女子の役割の違いがうかがえる。「一緒に住んでいる大人（親など）と話をするか」との問いでは、「よくする」が60.9%（女子70.5%、男子49.5%)、「ときどきする」は27.7%で、これらを合計すると88.6%の中・高生が家庭内で親等とのコミュニケーションがあることが分かる。宮古郡全体でほぼ同様の傾向がみられる。「休日は家族と一緒に過ごすか」との質問では、「よく過ごす」56.3%、「ときどき過ごす」25.0%の回答を合計すると、81.3%を占めている。この割合は、宮古郡の合計よりかなり高いことが分る。

「住んでいる地域が好きですか」との質問では、「好き」68.8%、「どちらかといえば好き」25.0%で2つの回答を合計すると、93.8%を占めている。宮古郡の合計に比べて、多良間村では「好き」が20ポイント余り多い。(表10)「ボランティア活動を今後したいと思うか」との質問に対して、「ぜひしてみたい」との回答が37.5%となっており、宮古郡の22.0%より、かなり高い。「多分しない」は0%で宮古郡の22.5%と比較すると大きな差異がみられる。(表11)

「隣近所の人（大人）と話をするか」との質問では、「よく話す」18.8%、「ときどき話す」31.3%である。「よく話す」は宮古郡の合計より7.4ポイント高く、一方「全く話さない」は6.3%で、4.6ポイント低い。多良間村では、中・高校生と隣近所の人々とのコミュニケーションの頻度が高いことが分かる。多良間村の中学生は放課後「部活動をする」が75.0%と宮古郡の中で最も高い。「塾に行く」「ゲームセンターに行く」「公園や空き地で遊ぶ」等は0.0%である。「学校が休みの日はどのようにして過ごすか」との質問では、「家事等を手伝う」が62.5%を占め、宮古郡の合計16.8%に比べかなり多い。また、「家等で勉強する」は31.3%で宮古郡の7.1%に比べるとかなり多いことが分る。

「今まで辛いと思ったのはどんなときですか」との問いでは、「親や先生から納得のいかない理由で怒られたとき」25.0%、「疲れているのにのんびりさせてもらえないとき」23.0%、「友達から仲間外れにされたとき」17.6%が上位となっている。この設問の回答は、宮古郡の中でほぼ同様の傾向がみられる。親や教師や友人との関係で思い悩む様子がうかがえるが、特に女子生徒では、その割合が多い。「相談したいことや、聞いてほしいことがあったとき気軽に話せる人がいるか」との質問では、「学校の友達・先輩」75.0%、「母」43.8%、「きょうだい」37.5%と上位を占めており、他の市町村に比べ多い。「父」「祖父母」等は0.0%である。

「ふだんお年寄りと接する機会があるか」との質問では、「よくある」18.8%、「ときどきある」43.8%で合計62.6%を占める。宮古郡の合計は、55.1%であるところから、多良間村の中・高校生は、普段老人と接する機会が多いことが分かる。「お年寄りと一緒にどういうことをするか」の問いでは、「一緒におしゃべりをする」が92.3%で、宮古群の合計より約10ポイント多い。

「0歳の赤ちゃんの世話をしたことがあるか」の質問では、「以前日常的にしていた」が43.8%であり、宮古郡の合計22.9%よりかなり多い。「全くない」は25.0%で、宮古郡の合計36.0%に比べて少ない。(表12)「幼児の世話の内容」では、「だっこ」91.7%、「あやす」75.0%、「寝かせる」と「ミルクをあげる」が、41.7%で上位となっている。(表13)「赤ちゃんのイメージ」については、「かわいい」が87.5%で最も多く、宮古郡の合計より10ポイント多い。「かわいい」の回答は、「平良市」は69.1%で最も低い。(表14)

⑵「多良間村次世代育成支援行動計画」の概要

計画の趣旨(背景と目的)には、次のように記述されている。

「(前略)多良間村においては、合計特殊出生率が全国の上位にあり、近年全国から注目されていますが、過去からの人口構成をみると、全国や沖縄県と同様に少子高齢化の傾向を示しています。現在の合計特殊出生率が将来においても維持されるよう、引き続き、安心して子どもを生み育てる生活環境の確保、若者の定住促進等をむらづくりの大切な柱として、村民のニーズを把握しながら取り組みを進める必要があります。これまで多良間村で築いてきた“地域での支え合い”の礎にたち、次世代育成支援対策を強力に推進するための新たな指針として『多良間村次世代育成支援行動計画』を策定します」

平成15年7月に制定された「次世代育成支援対策推進法」では、地方公共団体は、国が示す行動計画策定指針に基づいて、行動計画の策定が義務付けられている。多良間村の「行動計画」は、国が示す七項目の指針に基づき、多良間村の子育ての状況と村の特性をふまえ、多方面にわたる施策が盛り込まれ策定されている。「計画の体系」は、図11に示す通りである。計画は、第三次多良間村総合計画基本構想をはじめ、村の子どもに関わる関連計画との整合をもち、多良間村が進めていく子育て支援施策の方向性を定めている。「行動計画」の計画期間は、平成17年度を初年度とし、平成26年度までの10年間とするが、平成17年度から21年度までを第一期計画期間とし、平成21年度から26年度までを第二期計画期間としている。

以下、「行動計画」の内容について概要を記す。

「宮古地区　次世代育成支援に関するニーズ調査」（平成16年３月８日～３月24日）より
未就学児童の保護者のアンケート調査（表5～表9）

表５　子育てに関して、不安や負担感などを感じているかについて

（%）

		合計	①非常に感じる	②なんとなく感じる	③あまり感じない	④全く感じない	⑤なんともいえない	不明
総計		1,411	45	362	648	145	160	51
		100.0	3.2	25.7	45.9	10.3	11.3	3.6
①平良市		893	35	236	407	92	93	30
		100.0	3.9	26.4	45.6	10.3	10.4	3.4
⑥多良間村		60	3	14	19	6	13	5
		100.0	5.0	23.3	31.7	10.0	21.7	8.3
再掲	宮古郡合計	518	10	126	241	53	67	21
	(②～⑥の合計)	100.0	1.9	24.3	46.5	10.2	12.9	4.1

表６　子育てで悩んでいること

単位：人、%

	総計		①平良市		⑥多良間村	
合計	1411	100.0	893	100.0	60	100.0
①病気・発育・発達	280	19.8	177	19.8	12	20.0
②子どもの障害	25	1.8	15	1.7	0	0.0
③食事・栄養	270	19.1	164	18.4	10	16.7
④育児の方法	19	1.3	14	1.6	0	0.0
⑤接し方に自信がない	64	4.5	47	5.3	1	1.7
⑥時間が十分とれない	286	20.3	175	19.6	10	16.7
⑦相談相手がいない	33	2.3	20	2.2	2	3.3
⑧仕事などができない	208	14.7	129	14.4	6	10.0
⑨子どもの教育	281	19.9	178	19.9	15	25.0
⑩子どもの交遊	122	8.6	81	9.1	6	10.0
⑪不登校など	18	1.3	12	1.3	2	3.3
⑫ﾊﾟｰﾄﾅｰの協力	96	6.8	53	5.9	9	15.0
⑬ﾊﾟｰﾄﾅｰとの意見相違	74	5.2	39	4.4	5	8.3
⑭近隣の見る目	41	2.9	27	3.0	1	1.7
⑮手伝ってくれる人がいない	95	6.7	75	8.4	2	3.3
⑯叱りすぎている気がする	368	26.1	225	25.2	21	35.0
⑰心身の疲れ	66	4.7	38	4.3	1	1.7
⑱虐待や養育放棄	25	1.8	13	1.5	2	3.3
⑲ｻｰﾋﾞｽ利用方法	52	3.7	39	4.4	0	0.0
⑳経済的負担	223	15.8	155	17.4	2	3.3
21.住宅がせまい	104	7.4	63	7.1	10	16.7
22.その他	50	3.5	34	3.8	2	3.3
23.特にない	216	15.3	137	15.3	7	11.7
不明	229	16.2	151	16.9	6	10.0

表７　お住いの地域はあなたにとって子育てしやすいですか

（%）

		合計	①とてもしやすい	②どちらかといえばしやすい	③どちらかといえばしにくい	④とてもしにくい	不明
総計		1,411	345	879	146	11	30
		100.0	24.5	62.3	10.3	0.8	2.1
①平良市		893	188	563	112	7	23
		100.0	21.1	63.0	12.5	0.8	2.6
②城辺町		125	35	75	14	1	0
		100.0	28.0	60.0	11.2	0.8	0.0
③下地町		109	33	71	2	2	1
		100.0	30.3	65.1	1.8	1.8	0.9
④上野村		77	19	48	7	1	2
		100.0	24.7	62.3	9.1	1.3	2.6
⑤伊良部町		147	49	87	8	0	3
		100.0	33.3	59.2	5.4	0.0	2.0
⑥多良間村		60	21	35	3	0	1
		100.0	35.0	58.3	5.0	0.0	1.7
再掲	宮古郡合計	518	157	316	34	4	7
	(②～⑥の合計)	100.0	30.3	61.0	6.6	0.8	1.4

表8　子育てをしやすいと思う理由

単位:人、(%)

		合計	①親が近くにいる	②知り合いが多い	③保育施設が充実	④教育機関が便利	⑤住宅事情がよい	⑥防犯面で安心	⑦自然環境がよい	⑧その他	不明
総計		1,224	727	352	126	221	232	98	376	29	7
		100.0	59.4	28.8	10.3	18.1	19.0	8.0	30.7	2.4	0.6
①平良市		751	424	202	88	150	182	46	194	21	3
		100.0	56.5	26.9	11.7	20.0	24.2	6.1	25.8	2.8	0.4
⑥多良間村		56	31	18	2	5	3	17	26	0	0
		100.0	55.4	32.1	3.6	8.9	5.4	30.4	46.4	0.0	0.0
再掲	宮古郡合計	473	303	150	38	71	50	52	182	8	4
	(②~⑥の合計)	100.0	64.1	31.7	8.0	15.0	10.6	11.0	38.5	1.7	0.8

表9　市町村に対してどのような子育て支援の充実を図って欲しいと期待するか

単位:人、(%)

		合計	①親子で安心して集まれる場・イベント	②子連れで出かけて楽しめる場所	③相談や情報提供の場	④保育所をふやす	⑤幼稚園をふやす	⑥児童クラブをふやす	⑦保育所等の費用負担軽減	⑧NPO等による保育サービスの充実	⑨住宅面での配慮	⑩職場環境の改善	⑪子育てを学ぶ機会	⑫その他	不明
総計		1,411	525	935	205	81	24	144	625	321	194	255	222	72	99
		100.0	37.2	66.3	14.5	5.7	1.7	10.2	44.3	22.7	13.7	18.1	15.7	5.1	7.0
①平良市		893	322	627	137	44	18	75	449	198	121	182	144	51	56
		100.0	36.1	70.2	15.3	4.9	2.0	8.4	50.3	22.2	13.5	20.4	16.1	5.7	6.3
②城辺町		125	58	67	13	2	0	20	54	26	17	17	14	1	11
		100.0	46.4	53.6	10.4	1.6	0.0	16.0	43.2	20.8	13.6	13.6	11.2	0.8	8.8
③下地町		109	22	68	15	2	2	10	29	25	16	20	21	2	12
		100.0	20.2	62.4	13.8	1.8	1.8	9.2	26.6	22.9	14.7	18.3	19.3	1.8	11.0
④上野村		77	42	48	11	1	0	10	25	9	10	9	10	7	4
		100.0	54.5	62.3	14.3	1.3	0.0	13.0	32.5	11.7	13.0	11.7	13.0	9.1	5.2
⑤伊良部町		147	46	91	22	22	3	19	46	46	21	21	25	8	10
		100.0	31.3	61.9	15.0	15.0	2.0	12.9	31.3	31.3	14.3	14.3	17.0	5.4	6.8
⑥多良間村		60	35	34	7	10	1	10	22	17	9	6	8	3	6
		100.0	58.3	56.7	11.7	16.7	1.7	16.7	36.7	28.3	15.0	10.0	13.3	5.0	10.0
再掲	宮古郡合計	518	203	308	68	37	6	69	176	123	73	73	78	21	43
	(②~⑥の合計)	100.0	39.2	59.5	13.1	7.1	1.2	13.3	34.0	23.7	14.1	14.1	15.1	4.1	8.3

中学生・高校生のアンケート調査（表10～表14）

表10　あなたはあなたの住んでいる地域が好きですか(中・高校生)

		合計	①好き	②どちらかといえば好き	③あまり好きではない	④嫌い	⑤無回答
総計		1,242	502	526	167	42	5
		100.0	40.4	42.4	13.4	3.4	0.4
①平良市		761	269	338	126	23	5
		100.0	35.3	44.4	16.6	3.0	0.7
②城辺町		129	51	59	13	6	0
		100.0	39.5	45.7	10.1	4.7	0.0
③上野村		70	37	29	3	1	0
		100.0	52.9	41.4	4.3	1.4	0.0
④下地町		80	43	25	8	4	0
		100.0	53.8	31.3	10.0	5.0	0.0
⑤伊良部町		186	91	71	16	8	0
		100.0	48.9	38.2	8.6	4.3	0.0
⑥多良間村		16	11	4	1	0	0
		100.0	68.8	25.0	6.3	0.0	0.0
再掲	宮古郡合計	481	233	188	41	19	0
	~⑥の合計)	100.0	48.4	39.1	8.5	4.0	0.0

1)　基本的な視点

「多良間村次世代育成計画」は、国の示す8つの視点を考慮に入れながら、村の特性を踏まえて、次の3つの視点に留意し策定されている。

①　島のすべての子どもと保護者のしあわせを第一に考える視点

わが国が平成6年に批准した「子どもの権利条約」にあるように、子ども一人ひとりを“権利の主体”として捉えていきます。子どもの家庭環境や障害の有無など、いかなる理由によっても決して差別されることなく、子どもの利益が最大限に尊重されるよう今後とも配慮します。子どもたちは、多良間村にとってかけがえのない存在です。『島のすべての子どものしあわせを考える子どもの視点』に立った取り組みを進めます。

国の次世代育成支援対策推進法の基本理念に「父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有するという基本的認識の下に、家庭その他の場において、子育ての意義についての理解が深められ、かつ、子育てに伴う喜びが実感されるように配慮して行わなければならない。」とあります。「第一義的責任を有する」とされる中で、誰にも相談できずに子育てに思い悩む保護者が見受けられます。子育て家庭にとって個人的な方法で子育ての悩みを解決することは、負担をともなうこともあり、それが結婚出産をむかえる若い世代の不安要因となっていることを忘れてはなりません。保護者に対しても適切な支援を図り、保護者自身が安定した気持を保ちながら子どもとの良い関係を築くことができるよう保護者に対する視点も大切にします。

②　だれもが住み良い地域づくりの視点

ニーズ調査で、多良間村は子育てしやすい地域と多くの人が感じています。子育てがしやすい理由として、「親が近くにいる」「自然環境が恵まれている」「知り合いが多い」となっています。親や知人と接点がもてることが子育てのしやすさに結び付いています。離島村にあって、安心して子どもを生み育て、健康に暮らせることのできる医療などの充実や、若者の定住促進の条件整備、地域社会での支え合いは今後も重要な視点です。

③　地域資源、対外資源の有効活用の視点

多良間村は、南の海に浮かぶ離島村です。人口規模も約1.400人と、子育て等のサービスには限りがあります。サービスが確保できず、都市部との格差も生じている場面がありますが、逆に都市部よりも地域の支え合いや暮らしの安心は豊かで、村民の多くは地域の行事に参加し、地域とのつながりを大切にしています。これは何よりも貴重な資源です。子育て関連サービスを充実していくため、今ある限られた資源（施設・人材等）の有効活用が大切な視点となります。さらに、島内の結束力や資源の有効活用はもちろんのこと、村出身者などの多良間村サポーター、村外の子育てに関する県や国などの施設・人材等の資源の積極的な活用も重要な視点です。

2)　計画の理念“はばたけ、たらまっこ！南の海に浮かぶ島の恵をうけて”

わたしたちの国において、急速な都市化や少子化の進行とともに、子どもや家庭、地域を取り巻く環境も大きく変りつつあります。そのようななか、改めて、思いやりの心や人と触れあ

うことの大切さが叫ばれています。

一方、わたしたちの暮らす多良間村は、今日の社会で見失いつつある他人を思いやり、自然を慈しむ心が今なお息づく島といえます。住民が子どもを生み育てることに喜びを感じることや、子どもたちが心豊かにたくましく健やかに育つことは、将来の島の発展と大きく結びついています。

そこで、世代を越えた村民みんなで協力しあいながら、将来を担う子どもの育ちや私たちの暮らしに欠かせない豊かな自然や文化、地域の温かい支えを大切に育み、さらに後世へと伝えていきます。そして、子どもの笑顔があふれる平和な島をめざします。

3) 計画の基本方針

村の行動計画の基本理念の実現を図るために、以下の4つを計画の基本方針としている。

① 健やかに生み育む健康づくり支援の充実
② 島のみんなが参加する子育て活動の推進
③ 次代を担う心豊かな人づくりに向けた教育の充実
④ みんなが住み良い島づくり

4) 行政の役割、村民（地域）、事業所に期待する役割

① 多良間村の役割

○多良間村は、多良間村の宝であるすべての子どもたちの幸せを考え、子どもたちの成長に良好な環境を整えます。

○多様化する村民の子育てニーズを把握しながら、村民（地域）や村外の多良間村サポーター、または事業所と協力しあい、利用者の立場にたった効率の良いサービスの展開をめざします。

○事業を行う際には、どのようにしたら多くの人に参加（利用）してもらえるか、または、関わってもらえるか、常に考え、村民が子育てに参加しやすいしくみへと変えていきます。

○子育てなど、サービスに関する情報提供を常に行います。

○良質なサービスが安定供給されるよう、サービスの提供者に対して働きかけを行います。

○子どもたちの育ちにかかわる分野は保健、福祉、教育、就労など多方面にわたるため、庁内の協力体制を強化し、本計画の着実な実施に努めます。

② 村民（地域）・事業所に期待する役割

＜村民（地域）に期待する役割＞

○村民一人ひとりが、子どもの育ちに大切なものは何か考え、子どもと道であったらあいさつを交わしたり、行事に参加するなど、できるところから子どもと関わりあいましょう。

○家庭では、性別にかかわらずすべての家族が、協力して家事や育児を行いましょう。

○子どもが幼い頃から、あいさつや食事、手伝いなど基本的生活習慣が身につくよう、心がけましょう。

○子育てのことなど、一人で悩まずに誰かに相談しましょう。

○地域の行事や活動などに参加し、人や地域とのかかわりを持ちましょう。

表11　ボランティア活動を今後したいと思いますか（中・高校生）

		合計	①ぜひしてみたい	②さそわれたらすると思う	③たぶんしない	④無回答
総計		1,242	207	638	392	5
		100.0	16.7	51.4	31.6	0.4
①平良市		761	101	374	284	2
		100.0	13.3	49.1	37.3	0.3
⑥多良間村		16	6	10	0	0
		100.0	37.5	62.5	0.0	0.0
再掲	宮古郡合計	481	106	264	108	3
	～⑥の合計）	100.0	22.0	54.9	22.5	0.6

表12　0歳の赤ちゃんの世話をしたことがありますか（中・高校生）

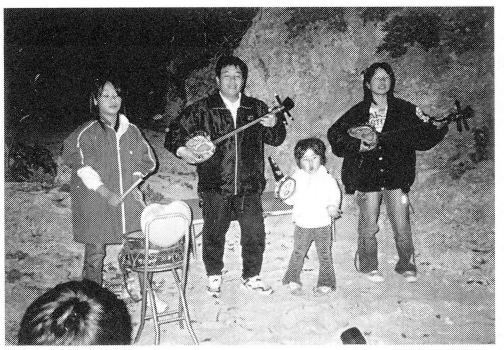
		合計	①以前日常的にしていた、あるいは	②1～2回世話したことがある	③まったくない	④無回答
総計		1,242	264	438	497	43
		100.0	21.3	35.3	40.0	3.5
①平良市		761	154	255	324	28
		100.0	20.2	33.5	42.6	3.7
②城辺町		129	29	45	51	4
		100.0	22.5	34.9	39.5	3.1
③上野村		70	15	28	26	1
		100.0	21.4	40.0	37.1	1.4
④下地町		80	13	32	33	2
		100.0	16.3	40.0	41.3	2.5
⑤伊良部町		186	46	73	59	8
		100.0	24.7	39.2	31.7	4.3
⑥多良間村		16	7	5	4	0
		100.0	43.8	31.3	25.0	0.0
再掲	宮古郡合計	481	110	183	173	15
	～⑥の合計）	100.0	22.9	38.0	36.0	3.1

表13　どんな世話をしましたか（中・高校生）

		合計	①だっこ	②おむつ交換	③着替え	④ミルクをあげる	⑤あやす	⑥寝かせる	⑦その他	⑧無回答
総計		702	632	244	242	387	460	346	25	2
		100.0	90.0	34.8	34.5	55.1	65.5	49.3	3.6	0.3
①平良市		409	370	136	145	223	270	199	18	1
		100.0	90.5	33.3	35.5	54.5	66.0	48.7	4.4	0.2
⑥多良間村		12	11	3	3	5	9	5	0	0
		100.0	91.7	25.0	25.0	41.7	75.0	41.7	0.0	0.0
再掲	宮古郡合計	293	262	108	97	164	190	147	7	1
	～⑥の合計）	100.0	89.4	36.9	33.1	56.0	64.8	50.2	2.4	0.3

表14　赤ちゃんのイメージをあげてください（中・高校生）

		合計	①かわいい	②小さい	③やわらかい	④弱い	⑤よく泣く	⑥手がかかる	⑦うるさい	⑧うっとおしい	⑨その他	⑩無回答
総計		1,242	894	442	268	45	292	143	104	28	19	13
		100.0	72.0	35.6	21.6	3.6	23.5	11.5	8.4	2.3	1.5	1.0
①平良市		761	526	265	167	27	177	96	71	22	17	7
		100.0	69.1	34.8	21.9	3.5	23.3	12.6	9.3	2.9	2.2	0.9
⑥多良間村		16	14	7	2	1	4	0	1	0	0	0
		100.0	87.5	43.8	12.5	6.3	25.0	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0
再掲	宮古郡合計	481	36.8	177	101	18	115	47	33	6	2	6
	～⑥の合計）	100.0	7.5	36.8	21.0	3.7	23.9	9.8	6.9	1.2	0.4	1.2



公民館勤務の手登根氏のファミリーによる多良間民謡の演奏。夜、海岸でバーベキューを食べながら楽しんだ。

民宿丸宮では、泊り客が主人と泡盛を飲みながら、多良間村の将来の発展について夜半まで議論を戦わしていた。

○地域において、子育てのアイディアを出し合いながら、子どもとのふれあい活動を充実し、それらの活動をとおして地域の活性化を図りましょう。

＜事業所に期待する役割＞

○事業所においては、地域の子育てに関する活動に参加し、社会的貢献に努めましょう。

○就労環境や労働条件の整備を図るとともに、男性の子育てへの参加に対する理解を事業所全体で深めましょう。

「行動計画」は、多良間村の将来を担うすべての子どもとすべての子育て家庭を支えるための計画であることから、村民、家庭（地域）、保育所、幼稚園、学校、医療関係、企業など、社会を構成するすべての人々の理解と参加が必要とされる。そのためには、村民が協力しあいながら、①行動計画の広報活動の強化　②行動計画の点検体制の強化　を図り、計画の実現への取り組みを推進するとしている。

8．考　察・・・・多良間村の子育て環境の評価

“子どもを大切にする風土と、村民の温かさとたくましさと”

「厚生労働白書」平成17年版の第1部　第2章　第3節「少子化を取り巻く地域の状況と取り組み」のコラム（93ページ）に「沖縄県の出生率が高い理由」について記述されている。出生率が高い背景として、沖縄県が他の都道府県に比べて、①共同社会的な精神がまだ残っており、子どもを産めば何とか育てていける。②男児跡継ぎの意識が強く残っているので、男児が生まれるまで産児を制限しない、という説がある。と述べられている。筆者は、多良間村で出会った人々に「出生率が、日本一の理由」を尋ねたが、「さあ、何故でしょうね。」との返答が多かった。村立多良間村診療所の若い男性医師は、「今まで多くの人から質問を受けた」といって、次の3つの理由をあげた。①保健所が設置されていること　②保育所が充実していること　③地域社会で支えあう風習があること。また、地縁に喜びを感じていること。豊川医師は、郡内の中で多良間村は、アルコールを飲む機会が多いことなどにより、村民に病気が多いことで突出していることを心配されていた。

島を訪れた人々は、簡素な暮らしぶりの中に、村人達の優しさと、子ども達が地域の中で元気に、大切に育てられていることに気付く。そして、「村民憲章」の中に示されている「お互いに助け合い、だれにも親切で、礼儀正しい村づくりにつとめます」「としよりや、こどもを大事にし、愛情ある村づくりにつとめます」　が、実現していることを知らされる。また、自然環境と文化遺産の保存と継承への努力や、教育の熱意など、村民が力を合わせて住みよい平和な郷土作りに取り組んでいる中にこそ、子育て環境が保障されているということが分かる。第三次多良間村総合計画・基本構想は、村民の「幸せ」と、村の発展を目指して作成されているということが、読む者に伝わってくる。その中に、「子ども達の笑い声が響き、お年寄りが元気で・・・」(基本方向二「活き活きした地域づくり」より)と書かれていることに感銘を受ける。多良間村の人間味あふれた風土と、美しい自然が一朝一夕に作られたものではないということである。長年の圧政の歴史と、厳しい自然環境の中で「お互いを思いやり、みんなで協力、助け合いながら、厳しい自然と共存しながら、美しい自然と、温かい心は、先祖から、培われてきた」ものであると記されている。

平成16年度の村立小学校と幼稚園の合同発表会で、子ども達と父母が、「多良間の子守り歌」を合唱したことは、守姉（ムリアニ）に象徴されるように、村民の多良間村の子ども達への思いが込められていると思われた。わが国の出生率の低下の要因の1つに、女性の社会進出、特に母親の就労があげられる。多良間村の女性の労働力率の曲線が、日本全国のものと異なり出産、育児期も就労を継続している山型の曲線を描いていることは、合計特殊出生率が日本一位にある中で、強い関心を抱かざるを得ない。

村民の島外への人口流出は、時代の流れの中で避けられないといえようが、日本の各地で暮らしている人々が結成している「同郷の会」が発行した著書からは、多良間村への思いと強い望郷の念がうかがえる。孤島の村の財政難は、保健、医療、教育、福祉の分野においてもかなりの制約をもたらしている。しかし、住民対象の調査結果において、母親達の殆どが、「子育てしやすい環境である」と回答している。また、中・高校生達は、「多良間村が好き」と答えており、一方、老人や、乳幼児達と中・高校生の交流は、六市町村の中で最高となっている。

エンゼルプラン以降策定されてきた数々の国の育児支援施策は、少子化の流れを止めることが出来なかった。子育て支援施策を思考するに当り、子育て環境としての多良間村の地域社会のあり方は一考に値すると考える。

9．結　語

金谷京子氏らの調査研究「子育て支援の限界と今後の課題―保育所を中心とした子育て支援活動調査から」には、「“子育て支援”を敢えてしなくてもよい社会づくりの意見」として自由記述がまとめられている。(注16)　9つに分類された回答の中で、「地域交流の必要性」「世代間交流の必要性」「社会の意識変革の推進」等は、多良間村では、古い時代から、今日まで受け継がれていることである。日本ではかつての地域の共同体社会は崩壊し、一方、新興住宅地にあっては、望ましい子育て環境形成への住民の連携が困難なところもみられる。このような地域社会において、孤立化した母親の育児の困難を始め、非行の増加や低年齢化、また犯罪の発生など暮らしにくさを余儀なくされている。

行政主導の「子育て支援施策」は、十分条件にはなりえないであろうが、国民が「育児問題」に関心を持ち、住民主体の「子育てしやすい環境」作りへの契機となるかも知れない。「子育てしやすい環境」とは、子どもや、高齢者、障害者などすべての人々が、暮らし易い地域社会であるということである。子どもを始め、あらゆる人々が、温かみのある地域社会の中で一人ひとりが大事にされ、安心した、幸せな生活を送れるということである。多良間村の子どもたちの「おばあ、一度多良間の島に来て見てよ」という声に誘われたかのように、思い立って訪れた島は美しい自然に恵まれた、平和そのものに見えた。しかし、島民の苦難な歴史の中で培われたという村民同士の助け合いの精神に感動を覚える。琉球王朝の流れを引く優雅な伝統芸能などの文化遺産、一方、第2次世界大戦末期の悲惨な沖縄戦は、(注17)(注18)　多良間村にも空襲の被害をもたらした。(注19)

2004年3月16日付け「宮古新報」は、5市町村が合併協定書に調印をし、「新宮古島市誕生に前進」と報じている。多良間村は、2回の住民投票の結果、「新市合併」には加わらなかった。(注20)「初めは、経済的に潤っても、そのうちに大きな市や、町の陰で小さい多良間村の存在は、忘れられてしまう。」ということを村人から聞いた。貧しくとも多良間村の自治と独立を村民は選択した。かつて、薩摩の侵攻と支配の下で260年余りを圧政に苦しめられた歴史的体験に基づく多良間村民の決定といえよう。(注21)　また、地元紙は、「下地島空港の軍事利用」に反対する伊良部町の住民集会について報じていた。(注22)　沖縄県を訪れてみると、県民の切実な平和を希求する姿に接し、沖縄県民にとっては戦後は未だ終わっていないことを改めて知らされる。

人口僅か1400人程の離島で、6巻に及ぶ立派な「多良間村史」が発行されていることに、訪れた人は、驚くことであろう。多良間村民が、沖縄県民として、多良間村民として、強い誇りを持って、凛として生きていることが伺える。このような大人達の姿を見ながら多良間村の子ども達は成長している。

日本民族学の父、柳田国男は1921年に沖縄を訪れ、日本文化の原点を探る上で沖縄の歴史、文化がいかに重要であるかを認識し、沖縄の重要性を著書などを通して訴えた。それは、その後の本土における沖縄研究の発展に大きく貢献したという。(「多良間村史」第1巻、225頁)
筆者にとって、沖縄県に対する理解の乏しさに気付かされた多良間村の訪問であった。

最後に、滞在中お世話になり、調査研究に快く協力して下さった多良間村の皆様に心からの感謝の意を表します。

(注)

1. 伊藤わらび「乳幼児の育児の実態と母親の育児意識」 武蔵野短期大学研究紀要　No.3、97～110頁 1987
2. 伊藤わらび「子連れで参加できる話し合いの場を」 全国社会福祉協議会「保育の友」1991年5月号、34～36頁
3. 伊藤わらび「乳幼児の育児の実態と母親の育児意識―その2. 10年間の変化にみる育児の諸問題と育児支援のあり方」 大妻女子大学紀要(家政系)　No.34、153～177頁　1998年3月

4. 2005年12月23日付朝日新聞 「人口減産めぬ現実」及び、同日付同紙社説「人口減少・悲観ばかりではない」
5. 2005年12月13日付朝日新聞 「初の少子化専任大臣―猪口氏就任から1か月」
6. 伊藤わらび「東京都の育児支援施策の現状と課題　その1. 全国最低の出生率にある巨大都市・東京の対策」　十文字学園女子大学人間生活学部紀要　第2巻　83～111頁　2004年12月
7. 「厚生労働白書　平成17年版」のコラムに「沖縄県の出生率が高い理由」として取り上げられている。
8. 渡久山春好著「人頭税廃止運動」
9. 平成14年度多良間村勢要覧「たらま」 資料編17頁
10. ビデオ「島のむかし歌、たらまゆう」 多良間村、多良間村古謡収録制作委員会企画・制作　1998年3月
11. 平成14年度多良間村勢要覧「たらま」 資料編4～9頁
12. 多良間村立多良間保育所「入園のしおり」 平成17年3月
13. 多良間村立多良間保育所「第26回卒園式並びに修了式のしおり」 平成17年3月
14. 平成14年度多良間村勢要覧「たらま」32～35頁
15. 前掲書、40頁
16. 日本保育学会編「保育学研究」第43巻第1号74頁　2005年
17. ビデオ「ドキュメント　太平洋戦史　沖縄―最後の死闘」サンユーフィルムジャパン制作、ペガサスランド発行　1994年8月
18. 朝日新聞2005年6月18日付　新垣勉「沖縄戦60年、歌い継ぎたい平和の願い」
19. 多良間村教育委員会編「村の歴史散歩」多良間村発行　50頁
20. 宮古新報2005年3月23日付 「多良間村長選　兼浜朝徳氏に出馬要請」
21. 朝日新聞2005年2月26日付 「ことばの旅人―伊波普けん」
22. 宮古新報2005年3月23日付 「下地島空港軍事利用許さない」

参考文献

1. 平成14年度多良間村勢要覧 「たらま」
2. 多良間村史　第1巻「通史編」「島のあゆみ」多良間村史編集委員会編集　多良間村発行　平成12年
3. 多良間村史　第2巻「資料編1」「王国時代の記録」
4. 多良間村史　第3巻「資料編2」「近現代の社会と生活」
5. 多良間村史　第4巻「資料編3」「民族」
6. 多良間村史　第5巻「資料編4」「芸能」
7. 多良間村史　第6巻「資料編5」
8. 「村誌　たらま島－孤島の民族と歴史」 多良間村発行　1973年
9. 「村の歴史散歩」 渡久山春好編集　多良間村教育委員会発行　1995年
10. 「たらましまの八月おどり」多良間村文化財保護委員会編集　多良間村教育委員会発行　1975年
11. 「広報　たらま」 各号、 多良間村編集・発行
12. 「宮古地区　次世代育成支援に関するニーズ調査」 多良間村　2004年3月
13. 「多良間村次世代育成支援行動計画策定業務」(計画素案) 多良間村　2005年3月

14.「多良間村ふるさと民族学習館のご案内」 多良間村民族学習館発行
15.「多良間村高齢者保健福祉計画及び介護保健事業計画　第2期」 平成15年3月　多良間村
16.「人頭税廃止運動」 渡久山春好著
17.「古琉球」 伊波普けん著　岩波文庫　1911年
18.「『沖縄学』の父・伊波普けん」 金城正篤・高良倉吉著　清水書院
19.「沖縄」 主婦と生活社　編・発行　1969年
20. 沖縄県広報誌「ちゅらしま　おきなわ・美ら島　沖縄」 沖縄県広報課編集、沖縄県広報協会発行
21.「だれも沖縄を知らない」 森口豁著　筑摩書房
22.「姜　信子のおばあの歌を追いかけて　①～⑩」 朝日新聞　2005年7月25日～8月5日
23.「ニッポン　人・脈・記　沖縄をつむぐ　①～⑩」 朝日新聞　2006年2月6日～2月17日
24. 厚生労働省編「厚生労働白書」平成17年版
25. 内閣府編「少子化社会白書」 平成16、17年版

SUMMARY

The measures of Tarama Village in Okinawa Prefecture was the highest tolal specific birth rate in Japan, on the average for 1998～2002, for 5 years, by the Reserch of the Ministry of Public Welfare.

I stayed for 5 days, from 22nd to 26th march 2005 in tarawa isolated island to study the reason of the highest birth rate in Japan and the atmosphere of the raising up children. While staying in Tarama Village I saw the daily life of people, and on the other hand I nead some publishments about the history, the customs, and the administration of Tarama Village. I understood the bonds of people in the community of the village is so strong, and people are very proud of the history of Tarama Village, for over 500 years.

People are not rich, but I think that it is sure to be not so difficult to bring up children for parents in the Tarama Village. They can bring up children in the beautiful nature surrounding sea, with kind people in Tarama Village. I think that people are very concerning and warmhearted on the all childern in Tarama Village. I am very impressed that they make efforts to bring up nicely their children by entering them in the high school out of Tarama Village, before leaving their home.